



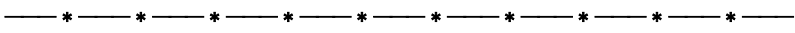
Data

監督：婁燁（ロウ・イエ）
 脚本：梅峰（メイ・フォン）
 撮影：曾劍（ツァン・チアン）
 出演：郝蕾（ハオ・レイ）／秦昊（チン・ハオ）／齊溪（チー・シー）
 ー）／祖峰（ズー・フォン）
 ー）／朱亚文（ジョウ・イエワン）
 ー）／常方源（チャン・ファンユアン）
 ー）／翟穎（チュー・イン）

👁️👁️ みどころ

張芸謀（チャン・イーモウ）監督は、女性3人との間に7人の子持ち。そんなニュースにビックリだが、それなら一人っ子政策と男子偏重思想の中、「二重生活」を送る男がいても仕方なし・・・？

相変わらず鋭い婁燁（ロウ・イエ）監督の問題提起は、中国の格差と矛盾にトコトン切り込みながら、男女の深層心理に迫っていくから、こりゃ必見！同時に、雨、手持ちカメラ、ざらついた映像、ロウ・イエ監督特有のそんなテクニクもしっかりと。



■ 賈樟柯やキム・ギドクと並んで婁燁作品は必見！ ■

私は中国映画が大好きだが、第6世代監督の1人である婁燁（ロウ・イエ）監督作品は、同じく第6世代監督の1人である賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督作品と並んで必見！ちなみに、『シネマルーム34』には、ジャ・ジャンクー監督作品は『一瞬の夢（小武/Xiao Wu）』（97年）（『シネマルーム34』256頁参照）、『プラットフォーム（站台/Platform）』（00年）（『シネマルーム34』260頁参照）、『四川のうた（二十四城記/24 CITY）』（08年）（『シネマルーム34』264頁参照）、『罪の手ざわり（天注定/A Touch of Sin）』（13年）（『シネマルーム34』269頁参照）の4つを、ロウ・イエ監督作品は『天安門、恋人たち（頤和園/Summer Palace）』（06年）（『シネマルーム34』300頁参照）、『スプリング・フィーバー（春風沈酔的晚上）』（09年）（『シネマルーム34』288頁参照）、『パリ、ただよう花（Love and Bruises）』（11年）（『シネマルーム34』294頁参照）の3

つを掲載した。

ロウ・イエ監督
作品で最初に観た
『ふたりの人魚』
(00年)は、幻
想的で美しい映画
だった(『シネマ
ルーム5』253頁
参照)が、続く『パ
ープル・バタフラ
イ(紫蝴蝶/PUR
PLE BUT



TERFLY)』(03年)(『シネマルーム17』220頁参照)や『天安門、恋人たち』は、かなりショッキングな映画だった。そして、『天安門、恋人たち』で5年間の映画製作・上映禁止処分を受けた彼が、フランスを拠点に作った『スプリング・フィーバー』と『パリ、ただよう花』では性愛が強調されていたが、原題『浮城謎事』、邦題『二重生活』、英題『Mystery』と題された本作では？

私は、韓国のキム・ギドク作品が大好き。そのため、『鱒』(96年)、『ワイルド・アニマル』(97年)、『悪い女〜青い門〜』(98年)、『魚と寝る女』(00年)、『リアル・フィクション』(00年)、『受取人不明(Address Unknown)』(01年)(『シネマルーム8』77頁参照)、『悪い男』(01年)、『コースト・ガード』(02年)、『春夏秋冬そして春』(03年)(『シネマルーム6』68頁参照)、『サマリア』(04年)(『シネマルーム7』396頁参照)、『うつせみ(空き家/Bin-Jip)』(04年)(『シネマルーム10』318頁参照)、『弓』(05年)(『シネマルーム12』325頁参照)、『絶対の愛』(06年)(『シネマルーム13』86頁参照)、『ブレス(息/BREATH)』(07年)(『シネマルーム19』61頁参照)、『悲夢』(08年)(『シネマルーム22』232頁参照)、『アリラン』(11年)(『シネマルーム28』206頁参照)、『レッド・ファミリー』(13年)(『シネマルーム33』227頁参照)、『メビウス』(13年)等とほとんどの作品を鑑賞しているが、中国映画ではロウ・イエ監督作品は必見！

■□■正妻と愛人の両立程度は当たり前？あの人に比べれば？■□■

1949年に建国された中国(中華人民共和国)は、中国共産党の一元支配の下で、さまざまな矛盾をはらみながら、1980年代の「改革開放政策」の実施によって経済成長を強め、今やアメリカと並ぶ二大強国になった。しかし、習近平政権が反腐敗運動に躍起になっていることからわかるように、党や政府幹部の腐敗ぶりはすごい。

本作のパンフレットには、福島香織氏（ジャーナリスト）の「中国の社会情勢からみる『二重生活』」と題したコラムがあるが、これは必読！これを読めば、今の中国のある種の腐敗ぶりがよくわかる



うえ、なぜロウ・イエ監督が本作を監督しようとしたのかもよくわかる。「虎もハエも叩く」というスローガンに象徴される習近平の反腐敗闘争によって、これまでやり玉にあげられたのは①薄熙来、②周永康、③令計画だったが、彼らの蓄財額や愛人数はHow much? つい最近、第5世代監督の代表である張藝謀（チャン・イーモウ）監督も「女性3人との間に7人の子持ち」と報じられたが、さてその真相は？

大阪出身の俳優トヨエツこと豊川悦司によく似た（？）男・永照（ヨンチャオ）（秦昊（チン・ハオ））は、（正）妻の陸潔（ルー・ジェ）（郝蕾（ハオ・レイ））と共に事業を営んでいるが、家政婦を雇っているところを見れば、その生活水準はかなり高そう。今は一人娘アンアンのためにルー・ジェは仕事から退いているが、実業家としての能力はむしろルー・ジェの方が高いようだ。日本ならそれで十分幸せな家庭だが、驚くべきことに、ヨンチャオにはルー・ジェとは別に愛人・桑琪（サン・チー）（齊溪（チー・シー））がおり、ここでは男の子ユイハンを含む全く別の生活が存在していた。もっとすごいのは、サン・チーとユイハンの存在はヨンチャオの母親の公認であるばかりか、この母親は待ち望んだ男の子の孫に「家宝」という名前をつけようとさえしていたらしい。

前述したように、現代中国においては、権力や財力を持つ男が愛人を持つのは当たり前。それを助長し、それに正当性を付与しているのが「一人っ子政策」であり、男子偏重の思想だ。福島氏のコラムに書かれている中国のあの人の、この人や、新聞で報道されている中国のあの人の、この人に比べれば、本作にみるヨンチャオの正妻と愛人との「二重生活」程度はむしろ当たり前・・・？

■交通事故も雨、殺人も雨。これぞまさにロウ・イエ流！■

ロウ・イエ監督が作る映画の特徴の第1は、手持ちカメラとクローズアップ、そしてざ

らついた映像だが、英題を『Mystery』としたこともあって、本作ではそれがことさら際立っている。本作の冒頭は、若者たちが乗った2台の車が、交通事故(?)によって若い女性ス・シャオミン(常方源(チャン・ファンユアン))をはねるシークエンスだが、その冒頭からこの特徴が顕著だ。

ロウ・イエ監督作品の第2の特徴は、やたら雨のシーンが多いこと。それは『パープル・バタフライ』でも際立っていたが、『キネマ旬報』1月下旬号掲載のロウ・イエのインタビュー「見ること、聴くこと」によると、「監督の映画ではいつも雨、それも豪雨が降っていますね。なぜそこまで『雨』にこだわるのですか」との質問に対して、「今回の映画の舞台になった武漢の街は、真ん中を長江が流れているんです。だから僕はいつもその存在を感じていました。それに、雨が好きなんですよ。雨はあらゆる出来事をぼかしてしまう。人間の顔をより人間らしくする、つまり表情に動きが出る。それに予期せぬことが簡単に撮影できたりもするのです」と答えている。

豪雨の中で車の運転はより慎重にすべきが当然だが、女の子とイチャつきながら運転している金持ちのボンボンたちは、そんなことにはお構いなし。その結果、急に目の前の道路上に現れた、白い服を着た女性をはねてしまったから大変だ。車を停めて女性のところに戻ると、女性の右手は必死で若者の足を掴んできた。それに対して彼らは「なぜ急に飛び出したんだ!」と血を流しながら倒れている女性を責めたてただけではなく、その手を蹴とばしたうえ、身体まで蹴り始めたから、こりゃ一体ナニ。中国人、とりわけわがまま放題の若者たちのマナーの悪さは今や世界的に有名だが、いくら何でもこりゃひどすぎるのでは・・・?

冒頭に展開されるこの交通事故のシークエンスが一体何を意味するのかはサッパリわからないが、このシークエンスで観客が大きなショックを受けるのは当然。そして、ロウ・イエ演出による豪雨は、その効果を倍増させている。しかし、ストーリー展開の概要が掴めた後の、ルー・ジエによるシャオミンの殺人事件(?)や、ヨンチャオによる浮浪者の男の殺人事件(?)も豪雨の中だ。本作を鑑賞するについては、そんなロウ・イエ監督流の、雨の効用をしっかりと確認したい。



■□■ 2人のママ友の心理をどう読み解く？ ■□■

本作中盤には、サン・チーの家の中でそれぞれの子供たちを遊ばせながらサン・チーとルー・ジェが2人で話し込んでいるところに、ヨンチャオが入り込んでくるシーンが登場する。ヨンチャオにとっては、ルー・ジェ（+アンアン）の家庭と、サン・チー（+ユイハン）の家庭は全く別モノで、両者の接点はありませんが大前提だから、そんな状況がなぜ出現したのか全く理解できないはず。ところ構わずルー・ジェやサン・チーとのセックスに走るヨンチャオの姿や、正妻と愛人がいるにもかかわらず、更に第3の女シャオミンとラブホテルに入るヨンチャオの姿を見ていると、「男とは単にセックスさえあればいい動物」にすぎないとさえ思ってしまう。それにひきかえ、子供が同じ幼稚園に通っていることを利用して（？）ルー・ジェに対してママ友になろうと申し出たり、「夫が浮気しているようで心配なの」とルー・ジェに相談を持ちかけるサン・チーの策士ぶりはすごい。ここでは、2人が座る喫茶店の窓から、浮気しているヨンチャオとシャオミンが出てくる姿をルー・ジェが目撃するであろうことはもちろん計算済みだ。

ロウ・イエ監督は日本の尊敬する監督の1人として野村芳太郎監督を挙げているが、その野村監督は松本清張作品と切っても切れない関係がある。そして、言うまでもなく松本清張は、『霧の旗』（61年）や『黒革の手帖』（80年）に見る女のドロドロした執念をはじめとする人間の本性（本性）をトコトン追及した、私の大好きな作家だ。

社会的な立場としては、サン・チーは愛人だから本妻のルー・ジェに対して劣位にある。しかし、サン・チーが産んだヨンチャオの子供ユイハンは男の子だから、女の子しか産んでいないルー・ジェより明らかに優位。そのうえルー・ジェは自分やユイハンの存在を知らないが、自分はルー・ジェやアンアンの存在を知っているから、何かと自分の立場を優位に持っていくための策を巡らせることが可能だ。そんなサン・チーが日陰の身（=愛人）



の立場から表舞台に出るために巡らせた策の第1歩が前述のものだが、そんな策謀によってヨンチャオとシャオミンの浮気シーンを目撃したルー・ジェは、以降いかなる行動を・・・？これを出発点として、2

人のママ友の心理をどう読み解くかが本作最大のポイントになるので、そこにしっかり注目を！

■□■本作の童刑事VS『薄氷の殺人』の張刑事■□■

本作冒頭に登場するのは交通事故のシーンだが、ヨンチャオとシャオミンの浮気現場を目撃したルー・ジェが執拗にシャオミンの後をつけ、山の中でシャオミンの頭部を石で殴打するシーンを見ていると、ひょっとしてシャオミンの死亡は殺人事件・・・？そんな疑問も出てくるが、それは後にスクリーン上で「解明」されるので、あなた自身の目でしっかりと・・・。

交通事故の場合、その処理を担当する警察官は交通課だが、殺人事件ならそれは殺人課の刑事。しかして、本作に登場する童（トン）刑事（祖峰（ズー・フォン））はどちら？そこらあたりに注目しながら、トン刑事の動きを追ってもらいたいが、弁護士の私の目で見ると、彼の捜査はいい加減としか言いようがない。1月13日に観た刁亦男（ディアオ・イーナン）監督の『薄氷の殺人』（14年）に見る張自立（ジャン・ズーリー）刑事は、ロウ・イエ監督が大好きだという野村芳太郎監督の名作『砂の器』に登場する2人の刑事と同じように、殺人事件の捜査に執念を燃やしていた。ところが、本作にみるトン刑事はそれとは全然違い、シャオミンの母親が高額の賠償金とマンションを受け取ることで簡単に示談に応じてしまったことを知ると、それ以上の捜査には興味がないようだ。むしろ、トン刑事からシャオミンの死亡を聞かされた元カレのチン・フォン（朱亜文（ジョウ・イエワン））は、自ら事故現場に足を運んだり、シャオミンが落ちてきたのではないかと思われる崖の上に登って、貴重な証拠物と思われるキーケースを発見したりするから、余計トン刑事の捜査の粗雑さが目立ってくる。先日判決が言い渡された韓国のナッツ姫こと趙頤娥（チョ・ヒョナ）は、反省の気持ちが見られないと指摘されていたが、自分の運転する車で人をはねておきながら「飛び出してきた女が悪い」「高額の賠償金を払ったのだからそれ以上文句はないだろう」と平気でトン刑事にうそぶく中国の金持ちのボンボンたちの姿を見ていると、胸クソが悪くなってくる。そしてそれは、そんな言葉に何の反論もできず、自らの地位の保全に汲々としているトン刑事に対しても同じだ。「地獄の沙汰も金次第」とよく言われるが、まさに今の中国はそれ。当局から5年間の映画製作・上映禁止処分を受けたロウ・イエ監督だからこそ、こんな風に皮肉タツブリに中国の警察の腐敗ぶりを描くことができるのだろう。『薄氷の殺人』で見たジャン刑事と、本作に見るトン刑事を比べてみるのも一興だ。

■□■4つのコラムは必読！さて、あなたの分析は？■□■

1月30日付朝日新聞には、本作について、「格差くっきり 中国の縮図 製作禁止処分 あけロウ・イエ監督」と題する小原篤氏の評論が掲載された。そこでは、「車ではねたのは

有力者の子弟。ルー・ジエは新興の中産階級。サン・チーはボロアパートで息子と暮らす庶民。事故の真相を目撃するのは浮浪者。階層社会をくつきり描き出し、1本のサスペンスに紡いでいく」と書かれ、さらに「シャオミンは軽い気持ちで身体を許す若者。保身と事なかれ主義の警察も描いた。これで中国の完全な縮図になる」と書かれている。国会論戦が始まった日本では、民主党代表に就任した岡田克也氏が、2月16日の衆議院本会議の代表質問で、まず「格差社会の是正」を前面に打ち出して安倍総理に質問したが、岡田代表は、本作に見る中国の格差をどのように考えるのだろうか。

それはともかく、本作のパンフレットには前述した①福島香織（ジャーナリスト）の「中国の社会情勢から見る『二重生活』」の他、②大場正明（映画評論家）の「欲望と抑圧を描き出すフィルム・ノワール」、③真魚八重子（映画文筆家）の「松本清張的心理劇の様相も呈する、高度化したミステリー」、④市山尚三（映画プロデューサー）の「映画作家ロウ・イエと中国映画の現状」という三本のコラムがあり、これらは必読。英題が「Mystery」とされており、時間軸はかなりいじられているものの、『薄氷の殺人』に比べると、本作のストーリー自体は理解しやすい。したがって、これら4本のコラムを読みながら、現代中国の大きな格差や矛盾をしっかり感じ取りたい。

■□■三角関係の行方は？事件の結末は？■□■

本作における、ヨンチャオとルー・ジエ、サン・チーという正妻・愛人との三角関係は、最後にはルー・ジエがヨンチャオのもとを離れ、ヨンチャオとサン・チーがユイハンと共に楽しい家庭を維持しているという構図になる。しかし、今ユイハンの幼稚園で演奏会を夫婦揃って見物していたヨンチャオとサン・チーは、その直前には事件を目撃していた浮浪者を撲殺するという行為に及んでいるのだから、いくら何でもそんな2人に平穏な生活が待っているのはおかしいはずだ。本作は多額の賠償金を受けとったシャオミンの母親が交通事故の現場でお札を燃やす中、亡霊のようなシャオミンが姿を見せることによって終了する。しかし、チン・フォンによって新たな証拠が発見される中、今後シャオミンの死亡原因の解明はいかに進められていくのだろうか。

私は本作の舞台となった中国十大都市の1つである湖北省の省都・武漢にはまだ行ったことがないが、本作のラストでは空中から撮影された、その武漢の町が俯瞰される。ヨンチャオとルー・ジエ、サン・チーたちの「営み」はすべて武漢というまちの中で行われてきたわけだが、きっと天はヨンチャオとサン・チーがラストに見せたような幸せそうな家庭をそのまま維持させることはないはずだ。もちろん、本作はそんな将来像には一切触れないが、きっとそこには地獄が待っているだろう。さすがロウ・イエ監督、本作の問題提起の鋭さに脱帽！！

2015（平成27）年2月20日記